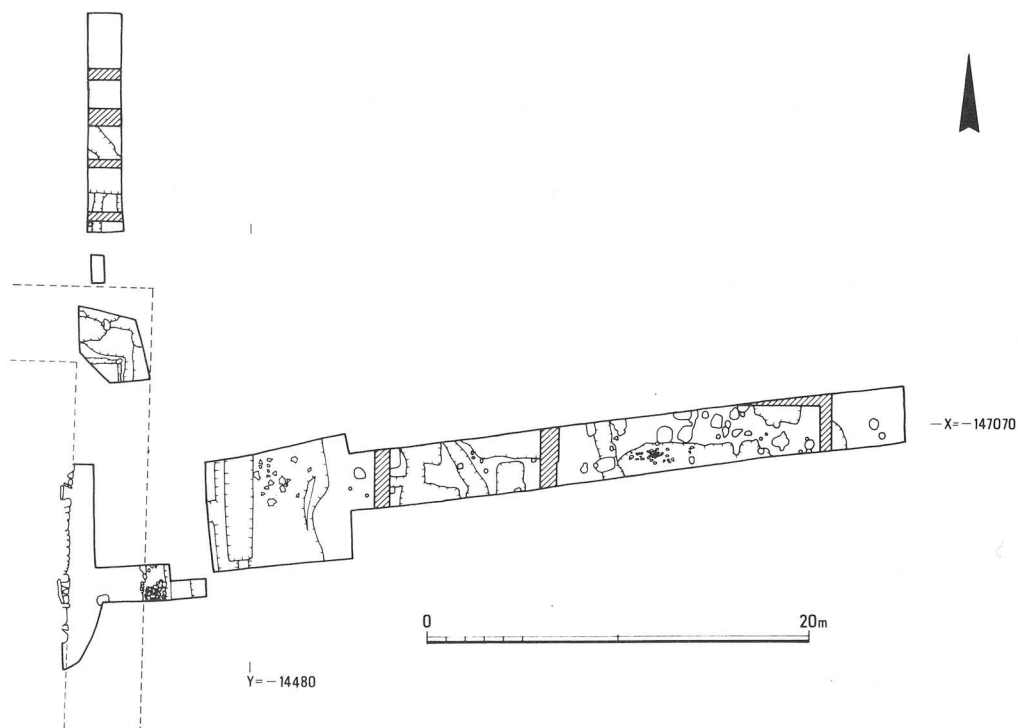


V 頭塔の調査

調査地は奈良市高畑町の史跡頭塔に東接する旧奈良地方法務局の敷地で、奈良県立老人福祉センターの建設にともなう事前の発掘調査を実施した。同時に頭塔の一部も発掘調査した。検出した遺構は、老人福祉センター建設予定地では、南北方向の大溝1条、史跡地内では塔基壇東端や第1段の壁体を確認し、新たに石仏1体を検出した。

老人福祉センター建設予定地の調査 東西50m、南北40mのほぼ長方形の敷地南端に南北3m、東西37mの東西トレンチ、敷地西端に東西2m、南北12mの南北トレンチを設定した。

当地は旧奈良法務局の建物基礎が随処に残り、発掘区全体にわたる攪乱がはげしい。東西トレンチ・南北トレンチともに、厚さ約10cmの表土の下が中世から現代までの遺物を含む茶色砂質の包含層であり、包含層の下が黄褐色粘質の地山で



第12図 頭塔・老人福祉センター内調査遺構図

ある。地山は東が高く西へゆるやかに下る。この地山面で小柱穴、溝、土壇などを検出した。しかし、東西トレンチ西端で検出した南北溝をのぞけば、他はすべて中世から現代のものであり、規模・性格は明確でない。

南北溝は幅6 m、深さ1 mの素掘り溝で、堆積土中から瓦類とともに土師器・須恵器・瓦器などの土器類が出土した。これらの出土遺物から同溝が平安時代後期に廃絶したと考えられる。この溝は後述する頭塔基壇東端から東4 mの位置にある。頭塔の北に接する南北トレンチでは、これにつながる溝は検出されなかった。南北溝は等距離で頭塔をめぐるものではないが、頭塔に関連したものであった可能性は高い。

史跡地内の調査 東面第1段の中央石仏の周辺と、東北隅との2ヶ所を調査した。東北隅では後世の攪乱のため顕著な遺構は検出されなかったが、中央石仏周辺では、石仏を中心にその北・南・東の三方を調査し、石仏前面を南北にはしる壁体石組み、石仏1体、塔基壇東端を検出した。

壁体石組みは自然石を垂直に積み上げたもので、中央石仏の前面50 cmの位置に東面をそろえて南北にはしる。中央石仏の北は6.5 mまで検出し、さらに北へつづく。中央石仏から南では2.8 mまで石組みが残り、これより南では石が抜きとられている。石組みは基底をほぼ水平にしてもっとも残りのよい所では上下3段、高さ約80 cmである。ただし、中央石仏と今回新たに検出した北石仏間の前面の石組みは2段で、基底からの高さは前者では45 cm、後者では50 cmである。

中央石仏から北5.3 m、壁体石組みから西50 cmの位置で石仏を検出した。最大横幅76 cm、縦70 cm以上、厚さ約10 cmの扁平な花崗岩立石で、東面に浅い線彫で仏像を描いている。像は「古維摩詰経」巻五問疾品にもとづく維摩詰居士と文殊菩薩の法論を主題としたもので、床机に坐した維摩詰をむかって右に、蓮台に坐した文殊を左に配し、文珠の左後方に三羅漢がしたがっている。

塔基壇は中央石仏の前方、壁体石組みから東4 mの位置で、南北方向にはしる基壇東端の石組みを検出した。基壇端は自然石を垂直に積み上げたもので、最高3段、高さ70 cmまで残る。基壇上面は西から東へゆるやかに下り、壁体基底と基

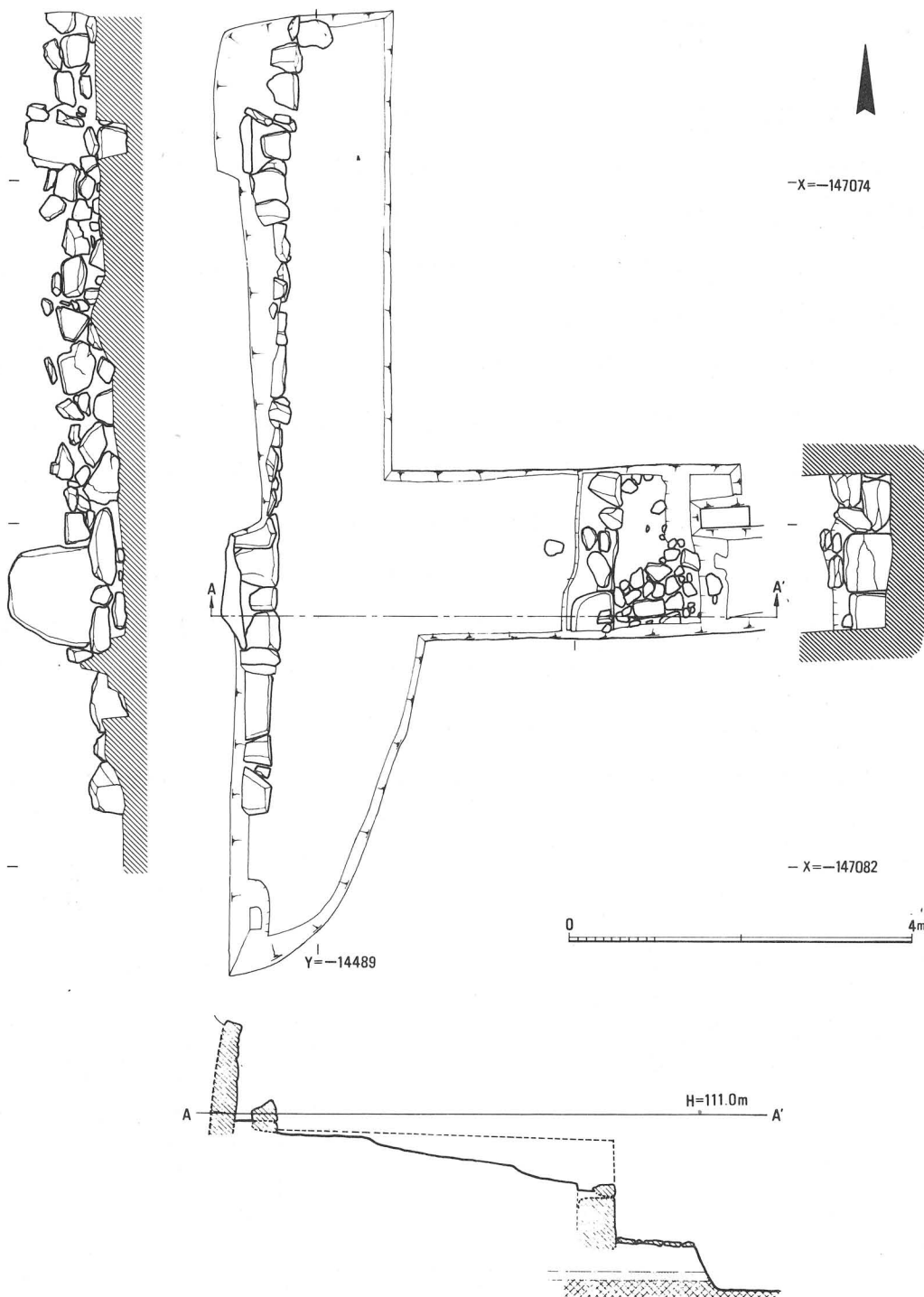
壇端石組み上端との比高差は50cmである。基壇上面には自然石ないし切石による化粧の痕跡はない。

基壇外周は人頭大からこぶし大までの自然石による平坦な石敷となっている。基壇端から東1mまでは石敷が比較的よく残っているが、それより東は後の攪乱によって切りとられており、石敷の本来の幅はわからない。

まとめ 頭塔については、当研究所がかって地形測量をおこなっている。これと今回の調査結果をあわせて頭塔の規模を復原すると、基壇は一辺32mの正方形に復原できる。第1段壁体は一辺24mに復原でき、壁体の3ヶ所に設けられた龕の中に各1体の石仏が安置されている。東面では、中央石仏と今回新たに検出した北石仏との心々距離は5.3mであり、いくぶん内寄りではあるが、一辺の壁体を四等分する位置とみることができる。また、壁体基底と基壇石組み上端とは現状で50cmの比高差がある。しかし、基壇上面は本来水平あるいは、それに近いものと考えられ、これによって基壇高を復原すると1.2m（4尺）となる。

いっぽう、基壇外周の石敷の下と基壇東北隅との2ヶ所で、地山と盛土との関係を確認した。東北隅では黄色粘質土地山の上に黄褐色粘質の盛土がなされ、石敷の下では地山と盛土との間に厚さ約20cmの黒色土が介在する。黒色土は旧表土と考えられる。頭塔築造に際して、地山の高い北側では旧表土や地山を若干削平し、地山の低い南側や西側ではむしろ盛土をおこなって基壇を形成したものと想定される。盛土は大まかな互層状を呈し、高さ10mに近い頭塔全体が盛土によって築かれたことが確実となった。

さらに、現存する石仏すべての位置を測量した結果、頭塔南北主軸線はほぼ真南北であることが分り、頭塔南北主軸線が東大寺大仏殿中心線と一致しないこととなった。しかし、今回出土した奈良時代の瓦は、軒丸瓦12点、軒平瓦23点ともすべて東大寺式瓦であり、頭塔が東大寺と密接な関係をもっていたことが前にもまして確実となった。



第13図 頭塔調査遺構平面・立面・断面図